

## 『幸せを賛美しよう♪』 ルカ1:39-56

1:39 そのころ、マリヤは立って、大急ぎで山里へむかいユダの町に行き、

1:40 ザカリヤの家にはいってエリサベツにあいさつした。

1:41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどった。エリサベツは聖霊に満たされ、

1:42 声高く叫んで言った、「あなたは女の中で祝福されたかた、あなたの胎の実も祝福されています。

1:43 主の母上がわたしのところにきてくださるとは、なんという光栄でしょう。

1:44 ごらんなさい。あなたのあいさつの声がわたしの耳にはいったとき、子供が胎内で喜びおどりました。

1:45 主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」。

1:46 するとマリヤは言った、「わたしの魂は主をあがめ、

1:47 わたしの靈は救主なる神をたたえます。

1:48 この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう、

1:49 力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。そのみ名はきよく、

1:50 そのあわれみは、代々限りなく／主をかしこみ恐れる者に及びます。

1:51 主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、

1:52 権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、

1:53 飲えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。

1:54 主は、あわれみをお忘れにならず、その僕イスラエルを助けてくださいました、

1:55 わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とを／とこしえにあわれむと約束なさったとおりに」。

1:56 マリヤは、エリサベツのところに三か月ほど滞在してから、家に帰った。

## ●序論

今日、2人の女性の出会いを見ています。

一人は、救い主の受胎告知を受けたマリアです。当時14~16歳くらいだったろうと想像される女の子です。そしてもう一人は、年老いてからから、不思議なご計画の中で、身ごもっているエリサベツです。

このエリサベツもまた、年老いてから、神さまのご計画の中恵みを受けて、子を胎に宿した女性でした。彼女の心からの感謝の賛美にこうあります。

1:25 「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました」と言った。

ふたりは親族でしたから、これまで会ったことがあったことでしょう。

でもここでの再会は、これまでと違っていました。その出会いが賛美に結ばれたのです。ある意味同じように神さまに触れられた二人です。その出会いを通して、二

人の間に共に主の恵みの御業を見上げる賛美が生まれているのです。

## ●本論

### I. ここに祝福の賛美がある。

1:39-40 そのころ、マリヤは立って、大急ぎで山里へむかいユダの町に行き、ザカリヤの家にはいってエリサベツにあいさつした。

天使から、あの年老いていたエリザベツも、同じ神さまの恵みにあずかったと聞いたからです。天使の言葉はこうでした。

1:36-37 あなたの親族エリサベツも老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六ヶ月になっています。神には、なんでもできないことはありません」。

婚約中だったマリヤは、まだ男の人を知らない処女でした。

そんな自分に、突然天使が現れて語られた言葉です。彼女はそれを聞きました。そしてそれを、戸惑いながらも受け入れました。

1:38 …「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」

ああ、ふたりともが、み使いに告げられたように、神さまの恵みの中で神さまの偉大な人々の救いのご計画の中に巻き込まれている！…という、ある意味では、共通した戸惑いを経験を分かち合える相手でした。

ここで、確かめるまでもなく相手のエリサベツが、聖霊に感動してこう口にしました。

1:41-45 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどった。エリサベツは聖霊に満たされ、声高く叫んで言った、「あなたは女の中で祝福されたかた、あなたの胎の実も祝福されています。主の母上がわたしのところにきてくださるとは、なんという光栄でしょう。

ごらんなさい。あなたのあいさつの声がわたしの耳にはいったとき、子供が胎内で喜びおどりました。主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」。

こうして、救い主を身ごもっているというマリヤの祝福がクローズアップされます。マリヤが、御使を通しての神さまからのメッセージを信じて受け止めていることを心から「幸いです！」「幸せです！」と祝福しているのです。

その二人の出会いに聖霊が感動を与え、互いを祝福する賛美が生まれているのです。

目を転じて今の教会を見てそのような集いとされているということです。

語られている御言葉や神さま経験を分かち合い、この二人に見るように、励ましや、共感を共にすることができるのです。

神さまがくださる、互いの人生への祝福を期待し信じる交わり、祝福しあう交わり、そこに祝福の賛美が生み出されるのです。

## Ⅱ. ここに感謝の賛美がある。

マリヤの賛美の中に、自分の人生に触れてくださった神様への賛美が表されています。

1:46-49 するとマリヤは言った、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの靈は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。

今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう、力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。

聖書が語るマリヤは、一人の普通の少女であり、また私たちと同じく神さまに目を上げて生きる信仰者の一人です。

神の子の母とされたということで高慢になるのではなく、自分がだれであるかしっかりわきまえながらこの賛美を表しています。

「この卑しい女」「取るに足らない」とは、卑屈な言葉にも聞こえますが、実は違います。マリヤがあえてこの言葉を使うことで、自分のありのままを認め、だからこそ得られる “神さま由来の幸せ” を語っているのです。

そして「主をあがめる」と言います。

口先ではなく、「わたしたちにまさる神さまの偉大さをそのまま賛美する」という意味です。つまり「私の心は、主を大きくします」という賛美です。

彼女は、自分自身の小ささを思っていました。彼女は〔卑しい（取るに足らない）女〕と自分自身を言葉にしながら、「そんな私を神さまが心にかけてくださっている」と「神を誇り」とし、そしてそんな私は「幸せだ！」と心から告白するのです。

これが賛美です。そして私たちもこの神さまの恵みと御業によって救われた神の子として、自らを「幸せ」と心から感謝することができるのではないでしょうか。

「もし自分が大きいというなら傲慢になる。物に対する関心が大きいと、際限ない物欲と享楽に陥る。他人の方が大きくなると劣等感に悩まされる…」と。

「しかもしも、あなたにとって神さまが大きいなら、これらのものから自由にされる。あなたは神さまの恵みの中、あなたは、あなたとしてふさわしく生きができるようになるでしょう…」と。

若いマリヤにとって突然訪れた、人生への神さまの介入は、どれほど困惑をもたらすものであったことか想像できます。

当時、結婚前に妊娠を知られれば、通常なら婚約解消、人々の蔑みと、非難の的、いや実際に石打ちの処刑をも予想されるような時代でした。

しかし「主をあがめます」と賛美する彼女の心は、エリサベツとの出会いとそこにある聖靈の感動を通して、どんなことがあっても、「神さまの真実のほうがはるかに大きい」ということを知ることができたのです。

神さまのご計画がわたしたちの上にある。わたしにゆだねられた使命を生きる幸せがあると。

それが賛美です。そしてそれを心から賛美することで、彼女とこのクリスマスの物語は進んでいくのです。

### Ⅲ. ここに逆転劇がある

：50-55 (LB) そのあわれみは、いつまでも、神を恐れ敬う者の上にとどまります。その御手はどんなに力強いことでしょう。主は心の高ぶった者を追い散らし、権力をふるう者を王座から引きずり降ろし、身分の低い者を高く引き上げ、飢え渴いた者を満ち足らせ、金持ちを何も持たせずに追い返されました。

主は約束を忘れず、…永遠にあわれむと約束してくださったとおりに。」

救い主によって語られもたらされる将来の祝福です。それが、このクリスマスが起きたその時から、もう成就したこととして告白されているのです。

それを簡単に言うならば、神さまの真実な計画が、信仰によって恵みにあずかる信仰者たちに及ぶ。

つまり、「逆転の幸せ。これが祝福だ」というのです。

マリヤとエリサベツは、人間の無力さや小ささを表す存在です。

当時の男性社会で、人数に数えられることもなかったような女性。少女と老婦人。

「心のおごり高ぶる」ことも「富」も持たない彼女たち。ただ持っているのは信仰のみ。「主のお語りになったことが必ず成就する」という信頼と「この卑しい女をさえ、心にかけてくださった」という感謝があるのみ。

そんな彼女たちを、神が！歴史の中で選び、重要な存在としてお用いになるのです。

ここに賛美があります。賛美することを通して、私たちは、「神さまが」何を語り、何をなそうとしているのか、そのことに心が開かれていく経験をするのです。

さいごに)

：56 マリヤは、エリサベツのところに三か月ほど滞在してから、家に帰った。このクリスマスを待ち望むアドベントの日々、

師走の忙しさもあり、心騒いで「神さまを待ち望み、共に賛美をする」という生活から〔靈も魂も〕離れてしまってはいないでしょうか。

私は、マリヤが天使の御告げを受けて、すぐにエリサベツの所に出向いた。そしてそこで3ヶ月を過ごしたというそのところに、信仰の人として生きるベスを見る思いがします。

神さまが大きくなれば、私たちは病んでしまいます。この世の価値観や悩みで押しつぶされてしまいます。

神さまが下さっている「幸せ」に気づくことです。聖書の御言葉が、お互いの恵みの分かち合いが、祈りあうことが、わたしたちにそれを気づかせて屈るでしょう。